Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-02

性の越境とセクシュアリティ : ジュディス・バトラー 蔦森樹

宗像, 恵

(Citation)
国際文化学研究 : 神戸大学国際文化学部紀要,20:27-69

(Issue Date)
2003-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001265

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001265

性の越境とセクシュアリティ

――ジュディス・バトラー、蔦森樹――

宗像恵

「見て…、感じて…、
触って…、癒して…」（ザ・フー）
だれを？
ぼくを？ あたしを？

序

社会のジェンダー構造に関わる諸問題のうちで、セクシュアリティにまつわる問題が大きな比重を占めることについては、異論は少ないであろう。その理由はもちろん、セクシュアリティが、社会における「男」「女」というカテゴリーの主要構成要因の一つであるからである。しかしさらに、『性の歴史Ⅰ 知への意志』（一九七六、一九八六）におけるミシェル・フーコーによる分析以来、ジェンダー一般と同じように、セクシュアリティが、不変な「自然」ではなく歴史的に形成され変動しうる「文化的所産」であるということが、広く認められてきているからでもある。しかもそればかりでなく、フーコーは、セクシュアリティとは時代の権力作用が社会の至る所に浸透し作動するための「装置」である、とも言っている。

フーコーは、性に関わる系譜学的探求において、「セクシュアリティ」が権力の作動する装置としていかに生起した

かを解明しながら、セクシュアリティの一形態として「同性愛」というカテゴリーが歴史的に生成した過程に光を当てた。また同時に、セクシュアリティの前提となると考えられる身体的性についても考察を加え、前提となる「性」という考え自体がやはり歴史的に生成したものであり、通念とは逆に、セクシュアリティの装置こそが自然な性という概念を生み出したのだと主張した。

このようなフーコーの主張は、彼のあと引き継がれ発展させられてきた。邦訳された文献だけでも、ジェフリー・ウィークス『セクシュアリティ』（一九八六、一九九六）、とくに同性愛の歴史的生成に関して、アラン・ブレイ『同性愛の社会史』（一九八二、一九九三）やデイヴィッド・ハルプリン『同性愛の百年間』（一九九〇、一九九五）、現在の異性愛的セクシュアリティの装置と身体的性の産出過程を分析し脱構築しようとする、ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』（一九九〇、一九九九）、その論の補強となる身体的性の歴史的形成に関する研究として、トマス・ラカー『セックスの発明』（一九九〇、一九九八）、など、枚挙にいとまがないほどである。

本稿の前半部では、これらの著作によって、現代文化において自明視されている、同性愛と異性愛、男の身体と女の身体といった、性に関わる二項対立的考えが、一定の権力の布置のもとに生み出された歴史的産物、文化的所産であることを確認したうえで、それらを揺さぶり攪乱する試みを検討する。ついでそれを踏まえて、後半部では、はじめに、男根中心主義の代表とされるフロイト思想に潜む反転の可能性を取り上げる。フロイトは、男女の性意識そして男女それぞれのセクシュアリティの発達を、ペニスの有無を中心に理論化しようとした。しかし、男性を人間の標準体とする伝統に回帰した、このようなフロイト思想には、逆に男性のセクシュアリティの始源に女性的受動性をみる、反転の可能性が潜んでいるのである。後半部のつぎには、性を越境する現代日本の作家、蔦森樹の述べるところを分析する。男から女へと性を越境しようとしたとき自分に何が生じたかについて述べる彼の自省的分析は、「男」あ

るいは「女」がどのように文化的意味づけによって構成されているかについて、教えてくれるところが多くあるだろう。

本稿の目的は、前半部と後半部を通じたこれらの分析によって、現在の性秩序を流動化する可能性を示唆し、それとは別様のありようを展望する一助とすることにある。

（一）

同性愛の発明

フーコーは、西欧十九世紀における「同性愛」というカテゴリーの成立を、新しい権力のメカニズム、「社会が身体と性の上に機能させた権力の型」の出現、により説明した。この権力は、「法」や「禁止」ではなく、「異形な性的欲望の細分化」によって作動する。それは、「性と快楽に対する権力の関係」の「細分化」と「多様化」を通して増殖するセクシュアリティが「介入の表面」となることによって、増大し拡大していく権力である。フーコーは、この新しい権力の型の出現とともに、それまで法的禁止に対する違犯「行為」として存在したソドミーとは全く別種の、同性愛という「倒錯」が、「異形の本性」が、細分化されるセクシュアリティの一つとして生み出されたのだと言う。

*

いうならば同性愛の発明というこのフーコーの主張を、社会史的に裏づけたのが、アラン・ブレイである。ブレイによれば、「同性愛」という語が発明される以前に使用されていた語、たとえば「バガー」は、同性愛だけではなく、同じように獣姦に対しても使うことができた。「ソドマイト（ソドミーを犯す者）」も同様に広い概念をもった語であった。こうした検討からブレイは、これらの語の背後にある考え方は、「同性愛」ではなく、「淫蕩」というもっと一般的な

観念であったと言う。同性愛が、そう名指された人間の人格を決定する不変の自然的「本性」と見なされるのに対して、淫蕩は誰もが陥りやすい「誘惑」であるにすぎない。

この点についてはウィークスも、「ソドミー」に関して同様な指摘をしている。「ソドミーを犯す者というのは、獣姦や肛門性交といった特定の性行為を行なう人物を指す言葉だった。」法律はソドミーという罪を、「男性と男性の間だけでなく男性と女性の間、男性と動物の間の関係にも無差別に適用」していた、と。

したがって、当時の「正常な」性行為を行なう者と「ソドミー」を犯す者という区分は、「異性愛者」と「同性愛者」という現在の二項対立的区分とは重なりあわない、別種の区分であったのだ。現在の区分では「異性愛者」に分類される、女性を相手に肛門性交や口腔性交を行なう男性は、この区分にしたがうならば、「バガー」ないし「ソドマイト」と分類されることになる。「異性愛」(heterosexuality)という語は、邦語訳では「愛」という言葉を含むものの(「同性愛」という訳語について竹村和子が指摘しているように、セクシュアリティに焦点化したこれらの概念に「愛」の文字を入れる訳語には問題がある)、ウィークスの言うように、愛情関係だけでなく強姦をも意味し、正常位から口腔性交、肛門性交にいたる性行為を包含するとともに、年齢の違いや、制度化の違い、さらには相手に抱く性幻想の違いさえも曖昧にするのであって、「対象選択の事実以外には何も示していない」のである。

性行為の規範に関して「淫蕩か否か」で境界線を引く文化は、性的対象が「異性の身体か否か」で境界線を引く文化とは、全く異質である。神の命令に反して、生殖につながらない性行為を快楽のために行なう者を、すべて有罪と規定する教会法をもつ禁欲主義的な文化と、性行為において快楽を重視し、最大多数の最大幸福を有力な倫理学原理の一つとしてもつ快楽主義的な文化。禁欲主義的な中世キリスト教会では、贖罪規定書において、肛門性交や口腔性交は「故意の殺人よりも厳しく罰せられて」いた(ウタ・ランケ=ハイネマン『カトリック教会と性の歴史』、一九九〇、一九九八)。ソ

ドミーという罪はこのような文脈で成立している。

イギリス・ルネサンス期を調査対象としたブレイは、また、ソドミーに関わる当時の宇宙論的背景を指摘している。ブレイによれば、ソドミーやバガリーは神による宇宙の秩序を解体する性的関係、それによって「天地創造の第一日目の混沌が再来する」行為と捉えられ、神の怒りにより滅ぼされた都市ソドム（ソドミーの語源）やゴモラのような大災害を引き起こすものと考えられた。ブレイは、大宇宙に対する小宇宙として人間を見る当時の宇宙論にしたがえば、「一個人の行動が宇宙全体の反響を呼び起こすことにもなりかねない」と考えられたのだ、と言う。

*

「ソドミー」を断罪した禁欲主義的キリスト教文化を離れて、さらに以前に歴史を遡ると、古代ギリシアにおいては、成人男性による若年男性に対する性的関係、つまり「少年愛」が、「正常で、自然なもの」「上品で名誉なこと」「賞賛にさえ値すること」として見なされていた、と言われる。これら二つの文化においては、類似の性行為に対する価値評価が正反対となっているわけであるが、それでは、「同性愛」とのカテゴリーの異同という点に関して、この「少年愛」ではどうなのであろうか。古代ギリシアの「少年愛」は現代の「同性愛」の先行者なのであろうか。デイヴィッド・ハルプリンはこの問いに対して、やはり否という答えを導き出している。

ハルプリンは、古代ギリシアでは性行為は、「高度に位階的」であったと言う。そこで決定的な要因として働いているのは、「ファルスの挿入と支配という性のエートス」である。重要なのは、「挿入する側の人間」なのか「挿入を受け入れる側の人間」なのかであった。性行為において、前者は「動作主」と見なされ、「ファルス挿入」は「能動性」の表現と見なされた。これに対して、後者は「受動者」と見なされ、「ファルス挿入への服従」は「受動性」の表現と見なされた。そしてハルプリンは、この相異がなぜ重要とされたのかを説明して、その理由は、能動的な性の担い手

と受動的な性の担い手という関係が、「社会の優越者と劣等者とのあいだに確立しているのとおなじ種類の関係」であると考えられたからである、と言う。

つまり、古代ギリシア社会では、「市民の優越した威信と権威は、そのままセックス上の優位――性的行為を始める権力、性的行為から快楽を獲得する権利、受け入れる側ではなく挿入する側の性的役割を担うこと――に現れていた」のである。したがって、性行為は、「個人の社会的地位の表明であり、社会的アイデンティティの宣言であった」ことになる。性行為にこのような意味づけが与えられる文化においては、少年愛の関係にある成人男性と若年男性の位階的関係を平準化して、「同性愛」として同質化するようなことは、「奇怪なことだった」。

古代ギリシア社会においては、性行為の担い手に関わるカテゴリーは、「能動」と「受動」、「支配」と「従属」とに分けられていたのであり、「男性」と「女性」ではない。それゆえ、アテネの成人男子市民の性的欲望の対象の適正さは、それが法的に自分より下位にある人間か否かによって決定されたのであって、性別は関与しない。そのようにして決定された適正な性的対象には、私たちには異種混合と見える、「女性」、「少年男子」、「外国人」、それに「奴隷」が含まれていた。したがって、ハルプリンは、「同性愛」と「異性愛」の区別は「古代ギリシア人にとって無意味だった」と結論づける。

女性のセクシュアリティ

以上の「同性愛」カテゴリーの歴史的生成に関わる検討によって、「同性愛」が、ヨーロッパ中世・ルネサンス期の「ソドミー」とも、古代ギリシアの「少年愛」とも別種の、近・現代において「発明」され流布することになった、歴史の浅い新しいカテゴリーであることが確認できたであろう。もちろん、歴史を遡るだけでなく、人類学的調査によっ

て報告されている各地の民族文化に見られる性現象との関係についても、同様のことが言いうる。ハルプリンも言うように、「同性愛者」というカテゴリーは、北アメリカ先住民族文化に見られる「ベルダーシュ」とも、通過儀礼として一定期間成人男性が未成年男性に精液の注入を行なうニューギニアの部族民たちとも、重なりあうことはない。「同性愛」とは、十八・十九世紀に生み出された、元来は西欧文化に特有な、ローカルなセクシュアリティのカテゴリーにすぎないのである。

より一般的に言うならば、以上の検討によって確認されたのは、外見上類似の性現象でも、異なる文化的文脈によって異なる意味づけを与えられ、別種のカテゴリー化を受けること、したがって、セクシュアリティは自然なものというよりは文化的所産であり変動するものであること、である。しかしながら、こうした検討や、成果としてのこのような一般的言明は、ただそれだけではいまだ不十分な面がある。視点を変えてフェミニスト的見地から見るならば、検討されたのは、同性愛とはいっても男性同性愛でしかなく、女性のセクシュアリティは全く検討の対象外とされていたことが、問題視されるであろう。肛門性交であろうが口腔性交であろうが膣性交であろうが、ファルスないしペニスの挿入に焦点化されたセクシュアリティは、男性のセクシュアリティでしかない。

ウィークスの言うように、「私たちは男性のセクシュアリティという概念を通して世界を見ている。そのためそうした男性のセクシュアリティを見ていないときでさえ、世界をその準拠枠組みを通して見ている」。女性のセクシュアリティは、これまで常に男性によって定義され、カテゴリー化されてきた。ペニスの「挿入」という言い方からしてすでに、性行為において男性を動作主とし女性をその受動的対象とする男性の視点に立った、男根中心主義的な物言いでしかない。しかし、多くの調査が明らかにしているように、ペニスの膣挿入による性器性交では、全女性の三分の二がオーガズムを得られない、というのが事実である。であるならば、通念的な女性のセクシュアリティに関しても、

その歴史的構築性について再検討する必要がある。フェミニスト的視点からのセクシュアリティ研究としては多くの著書が出版されているが、ここではスー・スコットとスティーヴィー・ジャクソンの編著による論文集『フェミニズムとセクシュアリティ』（一九九六）によって、基本的論点を確認しておこう。

*

現在の社会におけるセクシュアリティのあり方が男女間できわめて不均衡なものとなっている、ということには、異論は少ないであろう。たとえば、リズ・ケリーは、男性の女性に対する性暴力が連続的で普遍的なものであると主張し、性行為それ自体に関しても、「強姦とされない性交はすべて合意された性交であるという想定」に対して異議を申し立てる。

ケリーは、通常は「合意による」とみなされる性行為のうち、男性の求めに応じるよう強要する圧力が認められるものを分離して、「圧迫による性行為」と名づける。たとえば、拒否するのは申し訳ないと感じて女性が性行為に応じる場合や、拒否したときの男性の反応を予想し、応じたときと比べたコストを考えて性行為に応じる場合などである。また、より直接的な威嚇や威力の行使をともない、強姦とは呼ばれなくとも女性たちが「強姦のような」と描写する性行為を分離して、「強制された性行為」と名づける。強制された性行為は強姦とは区別されるものの、しかしその区別の理由は、相手と知り合いで以前に合意による性行為の経験があったりすることによって、あるいは、ある時点を越えたあと抵抗をやめてしまったことによって、彼女らがそれを「強姦」と呼ぶことに躊躇を感じるからであるにすぎない。

女性たちのさまざまな性的経験に関するインタヴュー調査をとおして、ケリーが結論づけるのは、「圧迫による性行為と強制された性行為と強姦との間に、はっきりとした明確な区別をすることは不可能である」、ということである。

（この点については、江原由美子も、「望まない妊娠をもたらすような性行為はすべて、レイプであると言ってもよいかもしれません」、と同趣旨の発言をしている。「婚姻例外」規定により夫婦間には強姦罪を適用しないなど、法体系も女性の性の自己決定権を無視ないし軽視してきた。）しかしケリーは、このような強要され、強制され、暴力的に犯された性行為だけでなく、さらに広範囲にわたる性的事象をひろい上げる。すなわち、職場におけるセクシュアル・ハラスメント、公共の場で押しつけられる、冷やかしの声や男性器露出などの性的な振る舞い、自宅に侵入する猥褻電話などである。そしてケリーはこれらの事象すべてを性暴力として捉え、合意によらない性行為に限らず社会のすみずみにまで浸透している「性暴力の連続体」であると名づけるのである。

このようなセクシュアリティをめぐる男女間の力の不均衡は、女性のセクシュアリティのあり方に男根中心主義的な偏りをもたらすであろう。ダイアン・リチャードソンは、「性行為が主として男性の経験の言葉で定義されている」ことを問題視して、先に挙げた女性のセクシュアリティに関わる調査結果を踏まえ、次のように問いかけている。「もしも五〇パーセントの男性が性交の間にいつでもオーガズムに達しないとしたら、それでもペニスの膣挿入はこんなにも重要視されるであろうか」、と。マスターズとジョンソンによる膣オーガズムに優先するクリトリス・オーガズムの「発見」があった後にも、「異性愛的関係においては膣性交は相変わらず、正常で、必要で、望ましいものと見られている」。これに対して彼女は、膣性交を伴った性行為が、「本物」であるとして特権化されていることに対して、根本的な疑問を投げかける。

リチャードソンは、このように性行為を膣性交と同一視するセクシュアリティの社会的構成は、「そもそもある活動がセクシュアルな行為と見なされるかどうかに影響を与えている」、と指摘する。女性への性暴力において、膣へのペニスの貫通がない「他の形態の女性への性暴力、力ずくの口腔性交ないし肛門性交、あるいはペニス以外の物品の膣

への挿入が、「より深刻でない」性的暴行の罪を構成する」とされるのはなぜか。あるいはまた、「レズビアンのセックス（性行為）がしばしば、未熟であり、性交ほどには満足を与えず、次善のセックスであると概念化される」のはなぜか。彼女は、こうした男根中心主義的見方に囚われない、多様なレズビアン・セクシュアリティの再構築を構想しようとするのである。

＊

しかし、ここで立ち止まり、ふりかえって考えてみる必要があるように思われる。「女性」といい「レズビアン」といい、それらのカテゴリー自体が文化的所産であるのならば、女性のセクシュアリティの再構築やレズビアン・セクシュアリティの再構築を論じる前に、それに先立って、はじめにそれらのカテゴリー自体を問題視しなければならないのではないのか、と。この点に関して議論の徹底化を図ったのが、ジュディス・バトラーである。バトラーは、性別化された「自然的身体」、「同性愛」など、セクシュアリティに関わるカテゴリーの歴史的構築性、というフーコーの主張を徹底して、それらのカテゴリーすべてを脱構築しようと試みる。

バトラーによる脱構築の試み

バトラーが提唱するのは、「アイデンティティの可変的な構築」を必要条件とするような、新しいフェミニズムの政治である。「女というカテゴリーを整合的で安定した主体として構築すること」には問題がある。現在の性別カテゴリーは、それ自体が、すでに一定の権力関係によって生み出されたものだからである。これに対して、バトラーによれば、ジェンダーとは本来、「その全体性が永久に遅延されるような複雑さであって、ある特定の瞬間に全容が現れ出るものではない」。「女」とはいつでも「進行中の言葉」であり、つねに「現在進行中の言説実践として、それは介入や意味

づけなおしに向かって開かれている」。ジェンダーが凝固しているように見えるとすれば、「その「凝固しつつある」ということ自体が、さまざまな社会手段によって維持され規制されている執拗で狡猾な実践なのである」。

そのような凝固した「ジェンダーの実体的効果」は、「ジェンダーの整合性を求める規制的な実践によってパフォーマティヴに産出され、強要されるもの」である。ジェンダー・アイデンティティというようなものがあって、その表出として行為が行なわれるのではない。逆に、「アイデンティティは、その結果だと言われる「表出」そのものによって、パフォーマティヴに構築される」のである。もちろんそのようなジェンダーの構築は一回限りのものではない。「反復されるパフォーマンス」が必要である。ジェンダーとは、内面に存在するのではなく、「様式的な反復行為をとおして外的空間に設定されるアイデンティティ」なのである。

問題は、「ジェンダーのある種の文化的な配置が「本物」の位置につき、巧みな自己の自然化を通して、その主導権を強化し増大させていること」である。それはどのような過程を通して推し進められているのか。一般的には、それは「ジェンダー規範の沈殿」という過程であると言いうる。ジェンダー規範の沈殿が、「自然なセックス」とか「本物の女」という特有の現象や、「広く行き渡っている強制的な社会的虚構」や、男女の「一対の身体形式」を生み出してきたのである。しかし、とりわけバトラーが着目するのは、異性愛制度である。男性性や女性性のさまざまな断片を取り集め、整合性や統一性を与えているのは、現行の異性愛制度である。「そういった断片は、異性愛の対象選択が排除されると、バラバラになり、崩壊し、解体してしまう」ことになるだろう。生み出され「自然化された」ジェンダーにおいて、「男女それぞれのジェンダーの内的整合性や統一性には、安定した対立的な異性愛が必要である」のだ。

バトラーは、このようにフーコーの系譜学的探究を発展させ、「女」、「性別化された身体」、「同性愛」と「異性愛」、といったカテゴリーの社会構築性を、パフォーマティヴィティという位相で捉え、その脱構築を試みる。彼女がめざ

すのは、「男性の主導権と異性愛主義の権力を支えている、自然化され物象化されたジェンダー概念を攪乱し置換する可能性をつうじて思考をすすめようとしていく」ことであり、ジェンダーに関わるカテゴリーを、「流動化させ、攪乱的に混乱させ、増殖させることによって、ジェンダー・トラブルを起こそうとしていく」ことにある。そのために課題となるのは、ジェンダーの反復的パフォーマンスにおいて、「反復しつつ、その反復そのものを可能にしている正にそのジェンダー規範を、ジェンダーのラディカルな増殖をとおして、どのように置換していくか」、ということである。

*

このようなアジェンダを立てるバトラーが注目するのは、ジェンダーのパロディ的な反復による模倣である。なぜなら、バトラーによれば、パロディ的な反復は、「永続的なアイデンティティという幻の効果がじつはひそかになされる政治的構築にすぎないことをあばく」からであり、「「起源」のパロディ的な反復」によって、「起源というものがそもそも、自然や起源という観念のパロディでしかないことが明らかに」なるからである。すなわち、バトラーは、パロディ的な反復はジェンダーを模倣することによって、ジェンダーの社会構築性、つまりジェンダーが様式的な反復的パフォーマンスによって構築されていることを顕わにし、「ジェンダーそれ自体が模倣の構造を持つことを明らかにする」、と言うのである。そのようなジェンダー・パロディとしてバトラーが挙げるのは、男性の身体がまとう女性の衣服・化粧・しぐさであり（あるいはその逆）、レズビアンがまとう異性愛的な男役／女役である。

しかし、このような戦略はどれほど有効であろうか。たしかにジェンダー・パロディは、鋭敏な知性には、ジェンダーの社会構築性を浮き彫りにするという効果をもつかもしれない。しかしそれは、バトラーが意図したように、「ジェンダーのラディカルな増殖」を生み出し、「ジェンダー規範を置換」することによって、「男性の主導権と異性愛主義の権力」を攪乱し転覆しえるであろうか。バトラーの意図が実現されるには、ジェンダー・パロディが散発的なもの

に留まらず増殖していくことが可能になる条件が、また、社会のジェンダー構造のなかで周縁化されずに主導的地位に近づきうるための条件が、あらためて検討されなければならないであろう。さもなければ、スー・スコットやスティーヴィー・ジャクソンとともに、「ドック・マーチンズと一緒になって短いバレエ用スカートを身に着けたからといって、家父長制をひざまずかせることになるのか」と、疑問に思わざるをえないであろう。

バトラー自身が言うように、ジェンダーを構築する反復的パフォーマンスを規制しているジェンダー規範は、「沈殿」している。またロバート・コンネルが言うように、男性性や女性性は単一ではなくすでに複数あって、主導的な男らしさが多くの男らしさを従属あるいは周縁化させ、女らしさは主導的な男らしさに順応あるいは抵抗しながらその周辺に配置される、というような関係にある。このような位階構造にあっては、ジェンダー・パロディは難なく周縁化させられていくだけであろう。

だが、他方で、スコットとジャクソンが、バトラーたちの理論的努力を評して、「クイア理論の台頭は、おそらく、草の根の闘いを推し進めることよりも、アカデミックな名声の獲得に関わっており、街頭での政治よりもアカデミズムでの政治という見地から、よりよく説明されるのであろう」、と言うのは、やや辛辣にすぎる。理論の先鋭化がそれだけでは社会の現状を変革する力を持たない、ということは、あらためて指摘するまでもない常識に属する。しかし、理論の先鋭化は、困難の所在をうまく言い当てることに成功するならば、意味づけの世界を変革する潜在力を持つ。意味づけの世界において、バトラーが標的とする「男性の主導権と異性愛主義の権力」を攪乱し転覆させるためには、その主導権と権力を支える支柱となる観念を「流動化」させることが肝要であろう。それはつまり、「男」と「女」の区別の基盤とされる「性別化された身体」の社会構築性、あるいは「同性愛」と「異性愛」という区分の社会構築性を明らかにし、「流動化」させることである。

バトラーは、前者については、「おそらく「セックス（生物学的・解剖学的身体）」と呼ばれるこの構築物こそ、ジェンダーと同様に、社会的に構築されたものである。実際おそらくセックスは、つねにすでにジェンダーなのだ」、「ジェンダーは、それによってセックスそのものが確立されていく正にその生産装置を指示するのでなければならない」と言い、後者については、「ゲイとストレートの関係は、コピーとオリジナルの関係ではなく、むしろコピーとコピーの関係なのである」と言うことによって、それぞれの社会構築性を指摘する。

セックスの発明

このうち、ジェンダーによるセックス（生物学的・解剖学的身体）の構築という論点については、トマス・ラカーが、人間身体の性別に関する諸理論の歴史的変遷を調査し、現在のように性別化された身体が、ワンセックス・モデルからトゥーセックス・モデルへの転換という形で、歴史的に生成した過程を明らかにしている。バトラーの議論を検討する前に、ラカーの調査結果を見ておこう。

ガレノスなど古代の論者にとって、男女の身体の解剖学的相異は、ふたつの対立的な何かをではなく、同一のものの完全性の度合を示すものと考えられた。男女を区別する生殖器官の相異は、完全性の程度の差を示す指標、完全・不完全という形而上学的位階秩序を表現するものと捉えられた。男性を人間の完全態とみなすこのような視点からは、女性の身体は独自性を否定され、女性の生殖器官は固有の名称すらもたないことが多く、男性の場合に体外に突出している生殖器官が、熱の欠如により身体の内側に裏返しに引き込まれたままになっているだけであると考えられた。だから、現在「膣」と呼ばれる器官は「永遠に生まれそこなったペニス」にすぎず、「子宮」は「成長がとまった陰嚢」、現在「卵巣」と呼ばれる器官も、体内で陰嚢から出た「睾丸」がその陰嚢（子宮）の両脇に定置されたものにすぎなかっ

た。

ルネサンス期の解剖学の発達も、この事態を変えることはなかった。それどころか、ワンセックス・モデルを強化さえした。「観察の正確さではなくイデオロギーが、それらの器官がどう見えるかを決定し、どの差異が重要であるかを決めた」のだった。また、男女の身体に質的差異でなく量的差異しか認めないワンセックスの時代にあっては、「いわゆる生物学的な性とされたものは、ジェンダーという文化的性のカテゴリーを保証する確実な基盤となるどころか、つねにそれを破綻させる危険性をもっていた」。したがって、ひとはジェンダーが変わればセックスが変わってしまうこともありえた。ラカーは、活動的に過ぎたため体内にあったペニス（＝膣）が体外に飛び出して男性に変わってしまった女性についての報告例を、引用している。

近代に入り十八世紀になると、人々はそれまで同一と見られた器官に、対立的な二種類の器官を見るようになる。そこには科学革命による自然観の変化といった認識上の問題もあったであろう。しかし性差に関わる認識上の変化とは、男性・女性に関わる文化的意味づけの変化でもある。それはつまり、新たな権力関係に対応した新しいイデオロギーの時代がはじまった、ということである。そのイデオロギーにしたがって、男女の生殖器官、とくに初めて女性独自のものと認められた女性の生殖器官には、過剰な意味づけが付与されるようになる。女性生殖器に固有の名称が与えられるようになるとともに、「子宮」あるいは「卵巣」という器官が、ちょうど「同性愛者」のセクシュアリティが同性愛者という「種族」の人格を決定するとみなされたように、女性という存在のあり方全体を決定的に規定するとみなされるようになる。言い方をかえれば、「ワンセックス・モデルの世界でジェンダーが行なってきた文化的作業をセックスが引き継いだ」のである。

時代は、「人間の本質的な自由と平等」が唱導された啓蒙主義の時代であり、市民革命の時代である。「その普遍的

原則から人類の半分である女性を排除するわけにはいかなかった」。ラカーは、そのために、「男性による公的支配の正当化は「自然」のなかに求められるようになり、この時代以降、ますます公私の領域区分は性差を基盤として表象されるように」なったのだ、と言う。このような「文化的な要請がセックスの言語を規制し、女性の身体を定義・差異化していく」ことになる。男性の身体と対立的な女性の身体という「自然な性」は、このようにしてつくり出される。新たな「セックスの発明」である。「セックスや性差はただ自然にそこにあるのではない。それはジェンダーと同じく造られるものなのだ。」

ふたたびバトラーの試み

「同性愛」「異性愛」のカテゴリーが近代に始まるものであることはすでに見た。しかし、性別化された身体そのものがこのように文化による構築物であるのならば、その区別を前提にした「同性愛」と「異性愛」の区別が文化に相対的な構築物であることは当然であり論をまたない、と言うこともできるであろう。それらは身体に対する多様な意味づけのうちの一部、性行為に関わる意味づけであるにすぎないのであるから。しかし、一般的にはそう言いうるにしても、「凝固した」トゥーセックス・モデルの意味世界において、バトラーが目指すように、それらの構築物を流動化させるためには、それらをどのように突き動かし、揺さぶることができるのだろうか。もういちどバトラーの議論に戻ると、彼女はフロイトのメランコリー理論を参照しながら、フロイト理論の根底に同性愛タブーを探り当てることによって、「同性愛」と「異性愛」の境界を流動化させ、あわせて、ひるがえり性別身体の境界を流動化させようとする。

*

よく知られているように、フロイトは人間のセクシュアリティの発達理論を唱えた。口唇期、肛門期、男根期からエディプス期へと進む、周知の発達理論である。このような発達過程において、男児と女児とを問わず、ひとが最初に認める性愛の対象は、母という女性であるとされる。したがって、このようなフロイトの理論枠組みにあっては、女性はセクシュアリティの発達において同性愛から出発することになる。これに対して男性は、初めから異性愛的であることになる。しかしながら、フロイトの議論は、個々の議論に立ち入って仔細に見ると、もう少し複雑であり問題をはらむ。

フロイトによれば、エディプス期を通過するとき、ひとは誰でも近親姦タブーにより最初の愛の対象、母を喪失する。この喪失が、すべてのひとにとっての愛の対象の喪失の始まりである。ところで、またフロイトによれば、メランコリーとは、失った愛の対象を自我構造のなかに内面化して留めておくことによって、失った対象と同一化することによって、愛の対象の喪失を克服しようとする心理機制である。そうであるならば、近親姦タブーによる母の喪失という事態に応じて、この失った愛の対象を体内化するメランコリーという心理機制は、ジェンダー形成において重要な働きをすることになるであろう。

メランコリーによるジェンダー形成のプロセスは、女性にとっては、失われる対象が同性愛的な愛の対象、母であるとされるのだから、同性ジェンダーの内面化であることになる。ここには破綻はない。しかし、男性にとってはどうなのか。女児と同じように、最初の異性愛的な愛の対象である母を内面化するならば、男児は女性ジェンダーを身につけることになってしまうであろう。フロイトの性意識の発達論に胚胎する、このような難点の起源はどこにあるのだろうか。上に見たように、フロイトは、女性には一次的な同性愛をたやすく認めながら男性には拒絶する、という偏向を顕わにするのであるが、このようなフロイトの男根中心主義的な異性愛主義が、ジェンダー形成の理論化と

いう場面で破綻をきたす結果をもたらしているのではなかろうか。バトラーは、難点回避のためにフロイトが仮定した理論的前提を分析することをとおして、フロイト理論のなかに、エディプス期の葛藤に働く異性愛的近親姦タブーに先行する、同性愛タブーを探り当てる。

*

これらの論点に関するフロイトの議論はどのようなものであったのか。彼の論文「自我とエス」にしたがって、もう少し立ち入って見ておこう。一方ではフロイトは、男児の場合、母への対象備給とならんで、同時に、父との同一化を仮定している。この仮定においては、自我客体（対象）でなく自我主体に関わるこの父との同一化は、一次的であるとされ、あらゆる性的対象選択に先行し、「どの対象備給よりも早期のもの」であるとされる。こうして男性ジェンダーの同一性は、他の要因に依拠することなく保障される。しかし他方ではフロイトは、「個体の体質的な両性的性質」を仮定して、男女ともに男性的・女性的な「性的性向（気質）」の双方が見られるとする。この仮定においては、男性的な性的性向と女性的な性的性向のどちらが優勢かによって、エディプス・コンプレックスが「陽性」のもの（男児の場合、父との同一化と母をめぐる父との抗争）となるか、「陰性」のもの（同じく男児の場合、母との同一化と父をめぐる母との抗争）となるかが決定される。バトラーが注目するのは、後者つまり「個体の体質的な両性的性質」の仮定である。

上の「陽性」と「陰性」のエディプス・コンプレックスの記述から窺われるのは、フロイトが両性愛を「ひとつの精神のなかの二つの異性愛的欲望の同時発生」とみなしたということである。「男性的性向は、性愛の対象として父に向かうことは決してなく、女性的性向は母にむかうことが決してない。」このような観点に立つと、男児が選択しなければならないのは、「二つの対象選択のどちらか」だけではなく、また「二つの性的性向、つまり男性的性向か女性的性向のどちらか」であることになる。したがって男児がたいてい異性愛を選び、「陽性」のエディプス・コンプレック

スの形成に向かうのは、「父による去勢」を恐れる結果であるより以前に、「異性愛文化のなかで男の同性愛に対して連想される「女性化」」という去勢を恐れる結果だということになる。異性愛的葛藤がテーマ化されるエディプス・コンプレックスの解消の物語の以前に、エディプス・コンプレックスの形成において、すでに「同性愛のリビドー備給」は「文化の認可を受けている異性愛に服従させられ」ていることになる。

だとすると、「どの対象備給よりも早期のもの」とされた一次的な父との同一化、というフロイトの仮定は、疑わしいものとなってくるであろう。男児が父と同一化して男性ジェンダーを身につけているのならば、それは、同一化に先行する父への同性愛的愛の喪失があったのではないのか。しかし、さらにフロイト理論の基底を突き詰めるならば、そもそも異性愛的な性的性向（男性的性向と女性的性向）を一次的だとする仮定そのものも、疑わしいものとなってくる。バトラーは問う、「両性性の「性向」を、一連の内面化の結果とか、その所産であると、なぜ考えることができないのか」、と。バトラーによれば、それらの異性愛的な性的性向は、同性愛タブーを「効果的に内面化した結果」であり、「解消されなかった起源の愛の喪失を隠蔽する」ものであり、決して「精神の一次的な性的事実」などではない。このような議論を通じてバトラーは、「この［ジェンダー・］アイデンティティは、この［同性愛］タブーが一貫して適用されることによって、明確に区分されたセックスのカテゴリーにしたがって身体が型にはめられ、また性的欲望が生産され「性向」とされることで、構築され維持される」のだ、と主張するのである。

*

さて、このようにしてバトラーは、異性愛的ジェンダー・アイデンティティが、近親姦タブーに先立って「同性愛タブーが一貫して適用されることによって」、構築され維持されていると主張するのだが、上のテクストでは、そうすることによって、「性的欲望が生産され「性向」とされる」だけでなく、その欲望のあり方を規定する性別化された身

体も、「明確に区分されたセックスのカテゴリーにしたがって」型にはめられるのだ、と言っていた。そのような性別化された身体が文化的に構築されるという点は、ラカーの歴史的調査が明らかにしたとおりである。しかしバトラーが異性愛制度によって「身体が型にはめられる」と言うとき、それはどのような意味で言われているのであろうか。

バトラーによれば、ジェンダーは、失った愛の対象を内面化するメランコリーという心理機制によって身につくものであった。しかし、それはどこに内面化されるのであろうか。バトラーは、禁止の法は「字義的な意味で内面化されるのではなく、身体化される」、というフーコーの議論を援用する。そのような身体化の結果、「身体のうえに、身体をつうじて、法を意味づける身体が生産される」。したがって、通常、内面化される場所として想定される精神とは、実際には、「社会的意味として身体のうえに書き込まれるが、それ自身がそのようなものであるとは永遠に否認する、内なる精神空間という比喩」にすぎない。

このように「精神内のプロセスを、身体の表面の政治として記述しなおす」ならば、ジェンダーを、「ジェンダー化された身体の構築」として記述しなおすことになる。この観点にしたがえば、メランコリーによる内面化あるいは体内化は、「喪失を、身体のうえ、あるいは身体のなかで、字義どおりのものとするのであって、そのようにして身体の事実性として、つまり身体が字義どおりの真実として「セックス」をもつようになる手段として、立ち現れてくる」。その結果、メランコリーは身体の表面全体におよんで、自然の事実として、「所与の「性感」帯に快楽や欲望を位置づけ、そして／または禁じる」ことになる。したがって、バトラーによれば、「快楽はペニスや膣や乳房に宿る、ないしはそこから発散すると言われているが、そのような記述は、そのジェンダー特有のものとしてすでに構築され、自然化されてしまっている身体に対応する」ものなのである。

しかし、繰り返して言うと、この性的身体の形成に先行し、メランコリー的体内化を発動させるのは、バトラーに

よれば、一次的な同性愛の喪失なのである。であればこそ、男児は男性の身体を、女児は女性の身体を獲得するのである。この時、「喪失は否定され、体内化され、この変容の系譜はまったく忘れ去られ、抑圧される」。その代わりに、「その愛は身体それ自体のある部分に保持される、ないしは暗号化される。セックスの見かけの解剖学的な事実性として、字義どおりなものとなる」。男児の場合、それはペニスである。「父への愛はペニスに蓄えられ、…そのペニスに集中することになった欲望は、絶え間ない否定を、その構造および務めとしてもつことになる」。この一次的同性愛の喪失の否定は、性的対象としての女の存在により完遂される。「〈記号としての女〉が、継ぎ目のない異性愛を聖別する性の歴史のために、異性愛より前の性の歴史を効果的に立ち退かせ、隠蔽しなければならない」のである。

*

フロイトは人間の性を、他の動物とは異なり本能的に決定されておらず、根本的に可塑的で社会関係のなかで形づくられる、という視点を開発した。しかし、彼は結局のところ、その形成を生殖活動に向かう発達過程として捉えたのであり、時代の通念にしたがい、「正常」と「異常」という規範的思考から十分には抜け出ることができなかった。これに対してバトラーは、そのようなフロイト理論の根底を探ることによって、フロイト理論に即しながら、異性愛の基盤には一次的な同性愛の喪失があることを見いだした。また、最終的目標である生殖的性行為へ向けて、口唇期、肛門期、男根期、エディプス期と発達していくとされた「性感帯」についても、その基礎にはやはり一次的な同性愛の喪失があって、それが性別化された身体の解剖学的事実性をつくり出していることを見いだした。

異性愛の基盤にも、性的身体の形成の基盤にも、それらに先行する一次的同性愛の喪失を見いだすこのバトラーの議論は、異性愛や性的身体の意味づけに対して真に攪乱的な変容をもたらし、「男性の主導権と異性愛主義の権力」の複合体である現在のセクシュアリティの体制の根幹を揺さぶるものである、と言うことができよう。その意味でバト

ラーの議論は、現在の異性愛制度を支える男たちの連帯に対して、イヴ・コゾフスキー・セジウィックが行なった分析に匹敵する作業であろう。セジウィックは、異性愛男性における「男同士の絆」（ホモソーシャリティ）が、同性愛嫌悪を含みながらも基底では同性愛とつながる連続体であることを明らかにした。このセジウィックの分析にしても、バトラーの分析にしても、これらの分析はいずれも、「凝固した」現在のセクシュアリティにおける「同性愛」と「異性愛」の二項対立を流動化させ、それによってまた同時に「男」と「女」の二項対立をも流動化させ、それらの脱構築に導くものである。

（二）

以上のフーコー以降のセクシュアリティに関わる諸著作の検討によって、文化的所産としてのセクシュアリティ、とくに権力装置としてのセクシュアリティの産出、ならびに前提となる「性」ないし性別化された身体の産出、というフーコーの主張を裏付けることができ、また、その権力装置としてのセクシュアリティを揺さぶる、歴史的あるいは理論的探究の試みを検討することができたであろう。

つぎに本稿の後半部では、この知見をもって、性を越境する現代日本の作家、蔦森樹の言うところを分析してみたい。彼の内省的分析は、現代日本にも流布する性に関わる二項対立的カテゴリーが、なんら自然なものでも自明なものでもなく、一定の権力関係によって産出された構築物であることに気づかせ、開かれたジェンダーとセクシュアリティの可能性を垣間見させてくれるように思われる。

ただその前に、バトラーが執拗に分析していたフロイトの言うところを、いま一度取り上げ、検討しておきたい。真に独創的であったフロイトの思想には、彼のいわば公式的理論の提唱にいたる過程で、事柄そのものの力によって、

公式的理論を裏切る形で、興味深い論点が浮き彫りにされることがあるからである。フロイトの理論は強い男根中心主義的傾向をもつ。しかし、彼の言うところを検討すると、公式に唱えられる、能動的で攻撃的で貫通的な男性セクシュアリティの称揚とは裏腹に、男性のセクシュアリティの始源に、受動的で貫通されるセクシュアリティをみる見方が潜むことが明らかになる。このようなフロイト理論の反転の可能性は、性に関わる現行の二項対立的カテゴリーを流動化させる一助となるであろう。検討の対象となるのは主として、とりわけフロイトの公式的理論がまとめられたと言いうる、『精神分析入門（正）』（一九一六～一九一七、一九七一）、『精神分析入門（続）』（一九三三、一九七一）における、男性セクシュアリティに関わる彼の議論である。

*

フロイトのゆらぎ

フロイトは男根中心主義の代表とされてきた。実際、彼の性意識の発達理論は、「去勢コンプレックス」を鍵として、ペニスを中心に編成されている。

フロイトによれば、男性の場合にも女性の場合にも、エディプス・コンプレックス、超自我の形成、潜伏期など、同型の性意識の発達過程が見られる。しかし同型ではあるが、発達過程は、男児の場合と女児の場合では同一でないと主張される。「男児のエディプス・コンプレックスは去勢コンプレックスにゆき当たって滅びてゆくのだが、女性のそれは去勢コンプレックスによって可能とされ、また惹起される」。すなわち、エディプス期において、ペニスを持つ子供は「去勢不安」から男性になり、ペニスを持たない子供は「ペニス羨望」から女性になるとされるのである。

フロイトにおいてはこのように、男女の性意識を分岐させる決定的な要因は、ペニスの有無にある。ここに悪名高い彼の言葉、「解剖学上の差異は運命である」、が発せられる。しかも、ペニスの有無は、「去勢コンプレックス」とい

う語に表わされるように、完全と欠如という価値的優劣と結びつけられ、階層化される。フロイトは、人間は男女ともに本来的に両性具有的であるとして性差の境界を緩め、男女の性意識の差異を生来のものとせず、生後の発達的分岐を唱えた。しかし同時に、ラカーの歴史研究に見たような、男性を標準体とし女性をその不完全な形態とする、古代以来の伝統に立ち戻ったのである。フロイトは言う、「リビドー発達の初めの頃の諸期は、いずれの性も同じ仕方で経過するように思われます。…小さな女の子は小さな男性であることを承認しなくてはなりません」、と。

しかも彼はこれに加えて、エディプス期を経て男性と女性に分岐していくとき、去勢不安に脅かされながらも男児はペニスを全うするのに対して、それまで「小さな男性」であった女児は、あるべきペニスの欠如を自覚させられ、ペニス羨望に駆られて代替物の獲得に向かうことを余儀なくされるのだ、と論じる。そして、女性の性器をペニスの不在ないし萎縮形態と見なし、女性の身体を不完全なものとすることによって、「女性がペニスを持たないことが発見されることにより、女の子にとっても、また男の子にとっても、そして後にはおそらく成人男性にとっても、成人女性の価値が下落してしまう」、と結論する。こうしてペニスの欠落を根拠とした女性蔑視が当然視される。

*

このような男根中心主義は、フロイトの思想のすみずみにまでに浸透しているように思われる。性器や性交に関してフロイトの説く表象像を見ると、男性性器には能動性から攻撃性、さらには暴力性までが付与されている。

例えば、夢理論において、ペニスを象徴的に代理するものとして挙げられるのは、「形の上で似ているもの」「すなわち長くて突き出ているもの」（ステッキ・傘・棒・木など）と並んで、「ペニスと同じように体内に侵入して傷つけるという点で共通性をもつもの」、つまり、「あらゆる種類の尖った武器」（メス・懐剣・槍・サーベルなど）や「飛び道具」（小銃・短銃・輪胴式ピストルなど）である。これに付け加えてフロイトは「複雑なあらゆる種類の機械類」を挙げて、これが象徴す

るのは「男子性器の威風堂々たる機制」であると言う。

同じく夢理論において、性交を象徴するものとしてフロイトが挙げるのは、「リズムをともなった運動」、つまりダンス・乗馬・山登りであり、また、はしご・坂・階段やそれらを登って絶頂に向かっていく運動であるが、しかしそれと並んで、車に轢かれるという「暴力的な体験」が挙げられ、さらに「当然そうである」として「武器をかざしての脅迫」が付け加えられる。

このようなフロイトの偏向は、リビドー自体に関する説明のなかにも現われる。彼は、リビドーには「ただ一種類のものしか」なく「リビドーそれ自体に性別を考えることはでき」ず、そのただ一つのリビドーが女性的性機能に使われたり男性的性機能に使われたりするのだ、と明言する。しかし、すぐに続けて、目的論的に言えばと留保をつけながらも、「自然」は女性的性機能の要求を男らしさの場合におけるほどに慎重に考慮しない印象がある、と述べ、その根拠を説明して（やはり目的論的に言えばと留保をつけながら）、「生物学的目標の貫徹は男性の攻撃に委ねられており、女性が同意するしないにはいわば左右されなくなっているという点にあるのかもしれません」、と述べている。

このフロイトの言葉は、「いわば」ともう一度留保を重ね、「かもしれません」と緩和させてはいるのだが、指摘されるように、女性の同意のない性交つまり強姦による、「生物学的目標の貫徹」つまり最終的には妊娠を、「自然」なこととして是認しているのではないかと疑わせる。この疑いは、この言葉に続けてフロイトが、「女性の性的不感症が頻繁に見られるのはこのような［自然の］冷遇を証明しているように思われます」、と述べるとき強まる。ここではフロイトは、社会的権力関係の結果であるものと、「解剖学上の差異」との区別を曖昧にしている。

＊

しかしながら、やや突き放して見るならば、こうしたフロイトの男根中心主義には、なにかしら滑稽で苦笑させる

ものがある。フロイトの思想に浸透しているのは、「男子性器の威風堂々たる機制」に対する愛着ではあるかもしれないが、その愛着は、去勢不安に脅かされた少年の不安感の裏返しであるようにも感じられるからだ。ウィークスが言うように、「ペニスの「攻撃的」で「荒々しく」、「貫くような」本性は、活動的な男性のセクシュアリティの範型になるものと見られてきた」けれども、「この象徴性と、実際しばしば体験されるペニス感覚との間には、著しい相違が見られる」のは、よく知られた事実である。「男性性器は、脆く、萎えやすく、繊細なものである。」

しかも、上述のように、男性を人間の標準とし、女性をその不完全形として、性意識の分岐以前の女児を「小さな男性」とみなすフロイトは、反面で、その人間の性意識の発達の叙述において、以下に見るように、正反対の可能性を示唆しているのである。このことは、フロイトによる男根中心主義の強い主張に潜む、別の志向を露出させる（竹村和子の言い方に倣ってフロイト自身の術語を用いて言えば）「錯誤行為」のように感じられる。

先にも触れたように、フロイトは、女性の性意識の発達を論じて、女性の性意識がエディプス期を経て分岐していくとき、ペニス羨望が、ペニスの代替物である子供を得たいという願望に、さらには子供を与えてくれる男性を得たいという願望に変化していく、と主張する。こうして女児は「最初の愛の対象」であった母を捨てて父を性愛の対象とするようになり、同性愛から異性愛に転換するのだ、と。しかしまたフロイトは、そのような「ペニス」や「子供」への情動的充当の先行者として、肛門期の「糞便」への関心がある、と指摘する。フロイトによれば、子供は肛門から生まれるという考えに固執する子供たちの確信では、排便は分娩行為の雛型であり、「子供」は糞便のように腸から生まれる。また、腸の粘膜管は満たしてこれを刺激する棒状の糞便は、「ペニス」の先行者でもある。これらの表象では、腸の粘膜管は膣と等価であり、「後になって目覚める膣への関心も主として肛門性愛に由来している」。

このようにフロイトによれば、女性の欲動生活の発達において、「もともと肛門性愛的な関心の一片が、後年の性器

的組織のなかに取り込まれる」のである。しかもフロイトは、さらに、女性が得たいと考えるペニスには、糞便という「肛門性愛的な根源のほかに、おそらくそれよりもっと強力な口唇愛的な根源を持っているのではあるまいか」、と自問する。そしてそれは、授乳期における母親の乳首であると考える。ペニスの先行者、「腸の粘膜管」を満たしてこれを刺激する「棒状の糞便」にさらに先行するのは、「口腔」を満たしてこれを刺激する「母親の乳首」であることになる。「授乳中止後にはペニスは母性器官である乳首の後継者ともなる」のだからである。

以上の説明は、このように要約すると、あくまでも女児の欲動生活の発達を述べているように見える。しかしながら当然のことであるが、これらの叙述はすべて男児の場合にも当てはまるのでなければならない。エディプス期以前には、ペニスを持つ子供もペニスを持たない子供も、性意識は分岐していないのであるから。すると、ここで女児の性意識の発達として語られたことは、実は男児の性意識の発達の叙述でもあることになる。であるならば、エディプス期以前の子供は、ペニスを持つ子供もペニスを持たない子供も「小さな男性」である、という公式の主張とは反対に、ここでのフロイトの叙述にしたがえば、解剖学上の差異にかかわらず、前エディプス期において、すべての子供は「小さな女性である」ことにはならないであろうか。

ここでのフロイトの叙述にしたがえば、膣の先行者が腸の粘膜管であったように、さらにその先行者は口腔であることになり、男児の性意識の発達における原初的な欲動経験は、乳首を挿入された口腔の性感帯としての興奮であったことになる。フロイトは、男性的な性機能を能動性に、女性的な性機能を受動性に求め、本来能動的なリビドーが、女性の場合には、侵入するペニスを膣に受け入れるという受動的目標に奉仕させられているのだ、と主張するが、その意味において、男児の原初的欲動は、侵入する乳首を口腔に受け入れるという女性的性機能において経験されることになる。

そして実は、このことは、間接的にではあるが、フロイト自身も認めていたように思われる。フロイトは、「乳児が乳に満足して眠る時、まことに幸福そうな満ち足りた表情を示していますが、その表情こそ、のちになって性のオルガズムの絶頂の時にくりかえされる表情にほかならないのです」、と言っているのだからである。言うまでもなく、ここで言われる「乳児」は、女児だけでなく男児でもある。

＊

すでに見たように、ハルプリンによれば、古代ギリシアの成人男性にとって、その男性性の徴表は「挿入する側の人間」であることにあった。またハルプリンは、五世紀半ばになっても、病理学上の現象とみなされたのは、同性の相手と性的接触を求めたいという欲望ではなく、性的に挿入されたいという男性の欲望であったと言う。フロイトは、そこに一貫して見られる男根中心主義を継承したのだったが、人間の性意識の発達の叙述の細部において、なぜか反転した議論を為してしまったのである。この反転した言辞は、フロイト個人の無意識の問題に関わるものなのであろうか。あるいは、フロイトがいつでも自説に対して承認を求めたように、人間に普遍的な現象なのであろうか。

いずれにせよ、このフロイトの「錯誤行為」から学び取ることができるのは、極度に推し進められた男根中心主義は、反対物に転化するという弁証法に巻き込まれる、ということである。もしもこのような不安定な事象が男性性の中核であるのならば、男性性自体も、女性ジェンダーの浸透を遮断する堅固なものであるどころか、容易に女性性に転化してしまう脆弱なものでしかないことになるのではあるまいか。

性の越境とセクシュアリティ（蔦森樹）

男性性の女性性への転化というトピックを考察しようとするとき、蔦森樹の自省的分析ほど多くを教えてくれるも

のはないように思われる。蔦森は、「男をやめてしまいたい」と思い、「女性になりたい」という願望を実行した男性である。蔦森は、そのときどのような境界線を踏み越えたのか。そして、境界線を越えることによって、蔦森はそれまでの自分とは異なる性、反対の性、女性になることができたのだろうか。蔦森の言うところを検討することによって、現代の性秩序の中で、男性を男性たらしめているのは何か、女性を女性たらしめているのは何かを、理解する手掛かりが得られるように思われる。

蔦森は、自分が「男をやめてしまいたい」と感じだしたとき、そこには「セックス（性愛）の問題がからんでいた」、と言う。「人間の身体で美しく愛らしく、そしてエロス的意味や価値があるのは、私の属していた男という性の身体ではない」ということに気づき、「女性の身体だけが人間の中で価値がある」と感じたことが、蔦森に「女性になりたい」という願望を呼び起こしたのだ、と。

そのような願望を持ち始める以前には、蔦森にとっては（多くの男たちの場合と同様に）、「女」とは、自分の性的欲望を喚起する記号であった。以前のマッチョな男であったとき、彼はただ女という記号に反応し、欲望を掻き立てられていた。「女の身体を感じさせるものに、女性の笑顔に、匂いに、女のイメージに。それを感じたとき、私は条件反射のように発情を繰り返した。」その当時の蔦森を含めた、そうした多くの男の状態は、「身体的エロスを喪失し、それがゆえに、一方的で過剰な条件反射的発情を繰り返す男たち」が、「エロスをくれ」と叫んでいる状態である、と描写される。

蔦森は、女のように装い女性ジェンダーを身につけて、「女の記号を自分のものとしてなじませる」ことに応じて、彼の「条件反射的な発情自体は確実に減って」いったと言う。「エロス的な意味や価値」を自分自身の身体に帯びさせ、自分自身が女の記号を身にまとうことによって、自分の外にエロスを求めることがなくなった、ということであろう。

こうしてジェンダーとしては女性の身体を獲得した蔦森は、しかし性器的にはペニスをつけた男性の身体を持ちつづけた。

*

このジェンダーとセックス（解剖学的性）とのギャップが、蔦森を性行為（セックス）に関して非常な困難に陥らせることになる。蔦森は言う、「だが、それとともに今度は、セックスの仕方もわからなくなってきた」、と。その困難が起きたのは、条件反射的な発情すなわち一方的な思いこみによるセックスは、「どんなにソフトなものであっても、それは質としてはレイプ同様のもの」「レイプと同じ性格を持っている」という思いにとらわれるようになっていったからであった。「一方的な発情からのセックスは、その多くがレイプに等しいものだとすると」、「相手を前にして、どうやってセックスをしたらいいのか途方にくれてしまう」ようになった、と言うのである。

この蔦森の陥った困難は、先に見た、リズ・ケリーの言う「性暴力の連続体」やダイアン・リチャードソンの言う「女性のセクシュアリティの再構築」に関わるものである。ただ男性の視点からのみ性行為を捉えていた蔦森は、自分自身が女性ジェンダーを身につけることによって、女性の視点から見たときに男性のセクシュアリティはどのように見えるのか、女性の視点に立ったときそもそもセクシュアリティとは何なのか、という問題に、いやおうなく気づかされることになったのである。

「一方的ではないセックス。その言葉を前にして、ベッドの上の私は混乱した」、と蔦森は言う。ジェンダーとしては同じ女性でありながら、性器構造が男性器と女性器とに異なる二人。このような二人の間で、一方的でない相互的な性行為はどのようにして可能なのか。男性性器としてペニスを持つ蔦森は、そのペニスによる膣貫通という標準的な性行為ではない、相互的な性行為のシナリオを創出するという困難に、立ち尽くすのである。「何をしてもすべてが

一方的なことに感じ、彼女の身体に触れる手は、とまどいから動かなくなり、インサートすることも心苦しく、いけないことのように感じるようになった。」「私はセックスができなくなってしまったのだ。」

*

蔦森の思い至った解決法は、能動的なセックスはしない、ということだった。「自分からもセックスはしない、そして相手の期待に積極的に応えることもしない。私がレイプをする側に立たなくても済む道はこれしかないだろう。」「相手にしてあげるセックスよりも、相手にしてもらうセックスになら、私は満たされるのではと思ったのだ。」そして彼はそのことを、性的主体ではなく性的客体（対象）になること、と言い表す。これまでは、標準的な異性間性行為のシナリオにしたがって、男性である自分が性的主体で、相手の女性が性的客体であった。「私の方は常に抱く側でセックスの意味を支える主体を背負い、相手は常に抱かれる側で客体になる」、という関係であった。しかし、「今度は私が欲情される客体になってみたいという思いだった」。「私が恋人の身体に欲情し、私が彼女の全身に触りその快感を引きだすように、私もこの身体に欲情されたいと思った。」

蔦森は、性行為においても女性ジェンダーを身につけようとした、と言うことができるだろう。しかし蔦森には、性行為において主体の側に立つことは、男性ジェンダーとしか考えられなかった。その当時のウーマン・リブのひとつの標語とされた「抱かれる女から抱く女へ」も、救いとはならなかった。言葉とは裏腹に、「抱かれる男がやはりセックスの意味を支える側にいることに変わりはなかった」と感じられたからである。性行為におけるペニスによる膣貫通に対する意味づけ、あるいはペニスによる膣貫通という事象それ自体に対する意味づけが変わらない限り、たとえ女性が能動的に振る舞っても、その性行為には男の性からの規定が抜き難く残存する、と感じられたのであろう。「日常では少なくとも男から離れていても、ベッドの上では〝男〟になってしまう。その苦痛に押しつぶされそうになっ

た。さらにセックス・イコール・レイプという思いも加わり、にっちもさっちもいかなくなってしまったのだ。」

蔦森は、相手の女性に「欲望され、ベッドの上で客体になりたかった」が、しかし「それをついに言うこともできなかった」、と述べる。「なぜなら、それは言うことでも要求することによってでもなく、そういう存在として私の身体が相手の目に映ることでしか、実現できないものなのだから。」そもそも蔦森が、ジェンダーとして女性の身体を得ようと求めたのは、「エロス的意味や価値」をもつ身体を望んだからだった。そしてそのことは、自分の身体が「美しく愛らし」い身体として、性行為において性的欲望を掻き立てうることでなければならなかった。客体として「抱かれたい」という蔦森の思いは、彼の身体がその「エロス的意味や価値」によって相手に「抱きたい」という欲情を喚起することで、満たされるのでなければならなかった。蔦森樹はどのようにしてこの苦境を抜け出ることができたのだろうか。

*

それはまず、相手の女性が彼の身体を美しいと認め、性的欲望を感じてくれることにより始まる。蔦森はマッチョな男だったとき結婚していた。しかし彼女は、女性ジェンダーを身に帯びることになった彼の「装いや身体に発情することはな」く、「わたしたち、姉妹になっちゃったんだね」という言葉を残して去って行った。しかしそののち、女性ジェンダーへと変化していった蔦森に、「そのままでいいんだよ」と声を掛けてくれた、別の女性と同居するようになっていた。あるクリスマスイブの晩、ふたりは初めてのセックスをする。蔦森は言う、「その夜、私は彼女に抱かれた」、と。ペニスを持ちながらも、つまり性器的には男性の身体でありながらも、ジェンダー的には女性である身体の蔦森。彼はどのように「抱かれた」のだろうか。

互いに全身を愛撫しあうことによって、蔦森は「お互いの性別が甘く溶けだし、男女という区別がなくなる感覚」

を味わった。この性別が融解した感覚、男女の区別がなくなる感覚を、しかし蔦森は、自分が男から女に変わったという感覚として言い表す。「それは互いに性がなくなるということではなく、私にとっては二人の女がそこにいるという感覚に近いものだった。性器の結びつきを最終的に目指すシナリオを外してしまえば、私の身体も彼女の身体も、何ひとつ変わらない存在に思えた。」

性行為からペニスによる膣貫通という最終目標を外し、ただ愛撫しあうとき、蔦森には男女の身体は、性器的相異を超えて、同じものと感じられた。しかし、「男女という区別がなくなる感覚」が、なぜ「女」という感覚に帰着するのであろうか。「エロス的意味や価値」をもつ身体は女の身体でしかない、という思いに突き動かされて、身体のエロス化を求めてきた蔦森にとって、欲情され愛撫されそれに感応することのできる身体は、女の身体以外ではありえなかったのだ。「ベッドの上では〝男〟になってしまう」という苦痛から逃れて、蔦森は初めて、性行為においても女性ジェンダーを身につけることができたと信じたのだ。

ジェンダーとして女性の身体を獲得したと信じた蔦森は、相手の女性との愛撫によって、ペニスに集中していた性感が全身に広がるのを感じたと言う。喪失され忘却された父への一次的な同性愛的愛が蓄えられたのだとバトラーの言う、ペニスに集中した欲望は、それが向かうべき〈記号としての女〉に蔦森自身がなることによって、身体の全表面に拡散していく。「何時間も続く抱擁、繰り返し脚をからめて肌と肌とをすべらせていると、永遠にそうしていたい甘い快感が全身にしみわたってくる。」「性器以外での、射精の他の快感を知らなかった私は、肌をすべらせることの甘い感触に夢中になった。」「男の身体などペニス以外は無意味なものだと思っていた誤りが、頭でではなく、体の感覚で溶けてしまったのだ。」欲情され愛撫され、相互的な肌のふれあいによって全身に性感を感じることにより、全身に「エロス的意味と価値」を回復しつつあるこの身体は、蔦森にとっては、性行為において、性器的には男性の身体

でありながらジェンダーとしては女性の身体に変貌する。

男から女へという蔦森の身体のジェンダー転換は、愛撫によって女性のように胸に強い局部的性感を感じさせられることで、さらに進んでいく。「小さな胸を彼女に愛撫されたとき、身体中に鋭い電気が走る快感を、はじめて経験した。」胸に感じたこのエロティックな感触に、蔦森は、「子どもに乳房を吸われる気持ちはこれなのかもしれない、好きな人に胸を与える感覚はこのことなのかもしれない」と思ったと言う。そしてそれとともにその瞬間に、「〝女性になりたい〟という根深い思いが、プツンと音を立てて切れた」と言う。「思いが切れた」という蔦森のこの言葉は、何を意味しているのであろうか。女性が乳房に感じるのと同じ感触を味わい、女性のような性感帯を獲得することによって、〝女性になりたい〟という願望を実現し、性行為においても完全にジェンダーとして女性になりえた、ということであろうか。そうであるとも言えるし、そうでないとも言えるように思われる。

「そうである」というのは、恐らく蔦森の意識の中では、自分が女性と同じ性感帯を持ち、それにまつわる社会的意味づけ、つまり「子どもへの授乳」や「恋人へ身を委ねるという性愛行為」に伴う「気持ち」や「感覚」を実感することによって、女性と同一化することができた、という自己了解が成立したと考えられるからである。蔦森の身体は「欲望の視線にさらされ」、相手の女性は「私の全身に触りながら、きれいだと言った」。「彼女の思うままに全身を愛撫され、指と唇で肌に触れられ続けると体の力が抜け、立っていられなくなった。そして、これ以上望むことはもう何もないという感覚にとらわれた。」

他方、「そうでない」というのは、ここまでの叙述では、性器的には男性の身体を持ち続ける蔦森が、ジェンダーとしての身体と性器的な身体との齟齬について、いまだ最終的な解決を得ていないと言わざるをえないからである。性行為からペニスによる膣貫通という最終目標を外して、互いにただ全身を愛撫しあうとき、そして思いがけず自分の

身体に女性と同じ性感帯を発見したとき、蔦森は、「女性になりたい」という思いが切れ、もはや望むことは何もないと感じたと言う。だが、それは、あくまで「性器の結びつきを最終的に目指すシナリオを外して」しまった性行為にのみ関わる体験でしかない。しかし性行為が性器結合に及んだときには、ペニスと膣という性器構造の差異という問題が、不可避的に浮上せざるをえない。蔦森はこの問題をどう解決することができたのであろうか。

*

蔦森は、「やがてペニスが彼女の身体の中に収められた瞬間、私は自分の男の身体を意識して身を固くした」と言う。「それまでは彼女と同じ身体だと感じていた私の身体が、ペニスを持つ存在であることを嫌でも思い知らされた」のだ、と。ジェンダーとして女性になりきったと感じられていた自分の身体に、ペニスの存在によって立ち戻ってくる男性性。どれほどジェンダーとして女性性を身につけても、男性器ペニスという生物学的特性を備えた蔦森の身体は、「女性になりたい」という彼の願いを裏切りつづける。このジェンダーとセックス（解剖学的性）の齟齬は、身体に手を加え、性器構造を男性型から女性型に改変することによってしか、解決できないのではないのか。

だが、ペニスと膣の相異とは、そもそも何なのであろうか。ペニスといい、膣といい、それらの相異を作り出しているのは、それらの物理的形態の違いなのか。それらが喚起する欲情の違い、それらに見いだされる性感の違いなのか。それはそうであるだろう。しかしながら、さらに根源にまで遡れば、それらの違いを違いとしているのは、私たちが行なっている意味づけの働きである。であるならば、意味づけが変われば、もはやそれらはペニスでもなくなり、膣でもなくなるであろう。

蔦森に思いがけなく到来したのは、今度は新しい性感帯の感触ではなかった。相手の女性から届いた言葉であり、思いがけない新しい意味づけであった。彼女は言った、「あなたのクリトリス、私も気持ちいいよ」、と。蔦森は、こ

の彼女の言葉によって自分に生じた衝撃と変容を、次のように語っている。「彼女の声が聞こえたとき、私の頭は粉々に砕け散ったような気がする。ペニスという存在はクリトリスの変形なのだ。ふたつは別のものではない。そう思うと心の底から安らぎが湧きあがり、突如、快感が押し寄せてきた。」

ペニスがクリトリスという女性性器の意味を帯びることによって、ようやく蔦森は完全に性行為を回復することができたのだった。相手の女性の言葉がもたらしたのは、ジェンダーによる文化的な意味づけの転換による、性器に付与されたセックス（解剖学的性）としての性差の解消であった。すなわち、ラカーの調査に即して言うならば、後ろ向きに近代の歴史を飛び越えて、男女を二分するトゥーセックス・モデルからワンセックス・モデルへと（ただしこのたびは女性を標準体とするワンセックス・モデルへと）立ち戻ることによって、ふたたび男女の性器がジェンダーとして同一の性器となったときに、蔦森は男女の二元制に即して構築されたセックスとジェンダーとの齟齬を乗り越えて、新しい自分自身の性を獲得することができたのだ。性器的性行為に生起する事象は、男根中心主義的観点から語られてきた「ペニスの膣への突き入れ」でもなく、女性嫌悪的視点から語られてきた「膣によるペニスの喰らい尽くし」でもなく、「入れることは包まれること。包むことは入れられること。能動でもあり受動でもある、分かちがたい感覚」として描写されるようになる。

蔦森は続けてこのように述べる。「そして不思議な感覚が私を襲った。それ（ペニスという名のクリトリス）は私のものでもなく彼女のものでもない。私のものであり彼女のものでもある。たまたま存在する単なる一本の棒。このことを悟った瞬間、私を男に規定し続けてきたペニスの重い意味が、ハサミで一気に切り落とされたように床に落ちた」、と。ペニスはもはや、それが担わされた男性性の過剰な象徴的意味を解除され、「たまたま存在する単なる一本の棒」となる。したがって、「ペニスを持つことで私は男なのではない。そしてペニスを取らなければ女になれないということで

もない」ことになる。

しかし、ペニスが男女の差異のしるしという意味を、それを持つ身体を男性の身体と規定する象徴という意味を失ったとき、〝ペニスを持ちながらも、つまり性器的には男性の身体でありながらも、ジェンダー的には女性である身体〟というような表現も、同時に意味を失ってしまうであろう。男性の身体が存在しなくなったとき、それとの対称により規定されてきた女性の身体も、同時に存在をやめることになるからである。「たとえ生物学的な違いがあったとしても、男と女とは、同じ存在なのだ。男と女とは、理由がどうであれ、自分で選択した状態なのだ。」

「男である」「女である」とは、「生物学的な違い」によるのではない。蔦森は、そうではなくそれは「自分で選択した状態」なのだ、と主張する。蔦森の言わんとすることは、おそらく、男女の差異が、「男」というそして「女」という言葉、「ペニス」「膣」「クリトリス」といった言葉に付与された、意味づけにより決定されるのであるならば、それがいかに自明に感じられ自然で不変なものとして直観されるとしても、その起源に遡り、文化的意味づけの恣意性にまで立ち返ることができるならば、「選択」の対象になりうる、ということであろう。

蔦森は、「このことを身体ではっきりと感じると、私の中にはもはや、自分で自らを男や女に規定することも、肉体を根拠に特定の性別と自己同一化する理由が、どこにも見当たらなくなった」、と述べている。「女になりたい」という蔦森の思いは、彼が実際に身体の意味づけの境界線を踏み越え、ジェンダーの境界線を乗り越えて、反対の性に移行することができたとき、「男である」「女である」ことが実体的なものではなく、人為的な構築物であることが顕わになり、蜃気楼のように消え去ることによって、思いがけない結果に至りつく。蔦森は、女性になったのではなく、男でも女でもない自分を発見するに至ったのである。「私を包みこんでいた彼女が絞りこむように力を入れたとき、身体が弓のようにひきつれて射精した。」「そして自分を抑えきれずに声をあげて泣いた。私は、男であり女であり、男

でもなく女でもない。そして私は私だったのだ。」

*

さて、以上の蔦森の自省的分析から私たちが学び取ることができたのは、何であったろうか。ひとつには、ジェンダーの境界線とは、身体の、性器の意味づけの境界線であるということであった。そしてふたつには、ジェンダーの境界線を越えることによってひとが到達するのは、反対の性ではなく、「男」「女」というカテゴリーの解消であるということであった。換言すれば、蔦森から私たちが学び取ったのは、バトラーの「おそらくセックスは、つねにすでにジェンダーなのだ」という言葉のもつ含意の射程の広さである、と言ってもよいであろう。

しかし、ひとはこの言葉の含意を十全に理解するとき、蔦森の言うように、「男」でも「女」でもない、性別のない「私」に、本当になりうるのであろうか。そうなのかもしれない。蔦森の確信が錯覚でない限りは。だがここで、バトラーの言葉には、ジェンダーとは個人の属性であるという以前に、そのような属性を成り立たせる文化による意味づけの作用であるという含意もあることに、注意しなければならない。ジェンダーの境界線は、文化が規定し意味づける「男」「女」というカテゴリー間の境界線である。この境界線は、踏み越えてみれば、蔦森が経験したように、個人の意識のなかでは蜃気楼のように消え去ってしまうものであるのかもしれない。しかしそうした個人的経験に反して、社会のジェンダー構造、バトラーの言い方にしたがうならば、「それによってセックスそのものが確立されていく正にその生産装置」としてのジェンダーは、個々人の攪乱し流動化させる試みに抗して、揺らぎはしてもなかなか崩れ去ることはないであろう。

幸か不幸か、私たちは、ヨーロッパのルネサンス期に見られた、小宇宙としての個人内部の変化が大宇宙の変化と照応するような世界には、もはや住んではいないのである。蔦森は、二人だけの関係から出てジェンダー構造をもっ

た社会に身をおくとき、ふたたびすべてが「男」と「女」という意味づけに浸透された世界に取り込まれ、「男」か「女」かいずれであるのか明確にするようにと迫る圧力に、不断に晒されることになるであろう。ジェンダー構造をもった社会のなかで、「男」でも「女」でもなく生きることは、限りなく困難であるにちがいない。

蔦森自身、男でもなく女でもない自分を発見したのちに、この困難に突き当たったことを回想して、つぎのように語っている。自分はジェンダーという概念に依拠することによって、ジェンダー・ロールを超えることができたが、さらに、ジェンダー・アイデンティティこそが「人が自らの持てる豊かさを十全に生かせない元凶」であると気づき、ジェンダーという概念自体が「鎖のついた重い足枷に変わってしまう」ことに気づいて、ジェンダーという視点からも離れた、しかしそのとき、「ほんとうに世界から離れてしまった感じがした」、と。蔦森が直面したのは、「性二分の社会に住む私には、瞬間瞬間に意味がついてまわる」という現実、しかも、何を見ても触れても感じても、「それはすぐに言葉に置き換わり、そうでなければ私は、まったく何も認識できなくなってしまう」という現実であった。そうであるのに、その意味づけの世界、言葉の世界には、蔦森の経験を表わす言葉がなかった。「あまりに汚れた〝男〟〝女〟に代わる別の言葉もなく、男でなく女でなくということを表わす言葉もない」のである。

蔦森は、もう一人の性を越境する作家、橋本治と対談したとき、「男でもなく女でもないのは苦しい」と打ち明け、「それはあなたに力がないからだ」と突き放されている。蔦森は、苦境から脱却するこの力を、どこから得ることができたのであろうか。

蔦森は、「男をやめてしまいたい」と思っていたとき、男のものとされるすべてを嫌い、そのために能動的なことを一切否定していた、と言う。しかし彼が放棄しなかった能動的行為があった、とも言う。それは「考えるということ」である、と。それは、「言葉によるコミュニケーション」に向かう「言葉による思考」「言葉による分析」であるだろ

う。だがその言葉の世界には「男女に代わる新しい言葉などない」のである。性を越境することに伴う種々の困難を、言葉による思考と分析によって乗り越えてきた蔦森、また、性器的身体とエロス的身体との齟齬にまつわる困難から、ベッドの上で相手の女性の言葉によって救われた蔦森であったが、その言葉が、逆に彼を性の二分法の世界に閉じ込める。

この苦境からの脱却の機会は、このたびは、言葉を越えた、神秘的と呼ばれるような体験とともに到来した。この体験そのものが何であったのかは措いておこう。問題は、そこから蔦森がどのような言葉を、――そう、やはり言葉、しかも言葉である限りどうしようもなく手垢にまみれているはずの言葉、しかし彼にとって新しい意味づけの世界を切り開きうる言葉を、紡ぎ出したかにある。

彼が思いを託した言葉とはどのようなものであったのか。「空も山も樹もこの身体も、すべては振動するエネルギーなのかもしれない。」「そこでの言葉なきあとの人は、共振と共感で自分自身や他の誰かとコミュニケーションをはかるだろう。」現実の生においては、それはかなわぬことなのかもしれない。だがほんのわずかでも、「共振することで直ちに感じる状態を垣間見られるかもしれない」。「たとえ全面的にそこへ至らなくとも、私の生は、誰しもの生は、その途上に乗っているということに間違いはない。」――これらの言葉は、多くの神秘家が語ってきた、言い古された言葉かもしれない。しかし、これらの言葉を蔦森は、自分の言葉として新たに語り出そうとしている。このような神秘家のヴィジョンは、性を、ジェンダーを越え、さらには個の境界を越えていく。「あれかこれかの二者択一ではなく、あれとこれという二者合一でもなく、全という一なる状態」、「それは、私が本当に豊かだといえる瞬間であり、…私が私を超え私たちとなり、人が個でありつつも個を軽く超えて光り輝く約束の地」、と。

このようなヴィジョンの下では、長いあいだ蔦森を動揺させ戸惑わせた、「なぜ女装をするのか」「結局は女になり

たかっただけでしょう?」という問いに対する答えは、「とても簡単になった」。つまり、「好きだから」という一言だけ。蔦森がしてきたこと、またこれからしていこうとすることは、「常にプロセスを味わい、在りたい自分を思いきり表現して今を生きる。そのことだけ」、なのだから。そして、性の境界が意味を失うとともに、個の境界も揺るぐ。「死ぬまでの時間に、…自分への誰かへの愛しさを、条件や限定をつけずに与え受け取ることがすべてだ。」

個の境界を越える…――私たちは蔦森樹の物語を辿りながら、性の越境という話題から遠くに来過ぎてしまったのだろうか。しかし、バトラーが言うように、現代の性の秩序を作り上げる要めとなっているのは、異性愛制度であり、異性愛的セクシュアリティにしたがった愛の形であった。だとすれば、蔦森の言う「愛しさ」は、現在の性のあり方を考え直すヒントを与えてくれるものなのかもしれない。蔦森は言う、「だから、恋愛でしかなかった愛を超えて、私の口にする言葉はひとつ。ＩＬＯＶＥ　ＹＯＵ。」、と。

つぎには私たちは、「恋愛を超えた愛」、あるいは「セクシュアリティに焦点化されない愛」について、論じなければならないであろう。

[参考文献]

（本文中に触れ、引用したもののみ。訳書については若干の字句の変更を行なった場合があるが、多くは訳文を使わせていただいた。記して感謝したい。また特に、性の越境とセクシュアリティの関係について多くを教わった、蔦森樹氏に感謝したい。なお、引用文中の傍点はすべて原著者のものである。）

江原由美子、『自己決定権とジェンダー』、岩波書店、二〇〇二年。

竹村和子、『愛について――アイデンティティと欲望の政治学』、岩波書店、二〇〇二年。

蔦森樹、『男でもなく女でもなく――新時代のアンドロジナスたちへ』、勁草書房、一九九三年、朝日文庫（副題を「本当の私らしさを求めて」に変更）、二〇〇一年。

アラン・ブレイ、『同性愛の社会史――イギリス・ルネサンス』、田口孝夫・山本雅男訳、彩流社、一九九三年。Alan Bray, *Homosexuality in Renaissance England*, Gay Men's Press, 1982.

ジュディス・バトラー、『ジェンダー・トラブル――フェミニズムとアイデンティティの攪乱』、竹村和子訳、青土社、一九九九年。Judith Butler, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge, 1990.

ロバート・W・コンネル、『ジェンダーと権力――セクシュアリティの社会学』、森重雄他訳、三交社、一九九三年。Robert W. Connell, *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics*, Polity Press, 1987.

ミシェル・フーコー、『性の歴史Ⅰ 知への意志』、渡辺守章訳、新潮社、一九八六年。Michel Foucault, *L'histoire de la sexualité 1, la volonte de savoir*, Gallimard, 1976.

ジークムント・フロイト、『精神分析入門』、『精神分析入門（続）』、懸田克躬・高橋義孝訳、『フロイト著作集Ⅰ』所収、人文書院、一九七一年。Sigmund Freud, *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*, 1916-1917, S. Fischer Verlag, 1994. *Neue Volge*, 1933, S. Fischer Verlag, 1994.

同上、「自我とエス」、小此木啓吾訳、『フロイト著作集Ⅵ』所収、人文書院、一九七〇年。――, 'Das Ich und das Es,' 1923, S. Fischer Verlag, 1994.

デイヴィッド・M・ハルプリン、『同性愛の百年間――ギリシア的愛について』、石塚浩司訳、法政大学出版局、一九九五年。David M. Halperin, *One Hundred Years of Homosexuality and Other Essays on Greek Love*, Routledge, 1990.

Stevi Jackson and Sue Scott(eds.), *Feminism and Sexuality: a Reader*, Edinburgh U.P., 1996.

トマス・ラカー、『セックスの発明――性差の観念史と解剖学のアポリア』、高井宏子・細谷等訳、工作社、一九九八年。Thomas Laqueur, *Making Sex: Body and Gender from the Greeks to Freud*, Harvard U.P., 1990.
ウタ・ランケ＝ハイネマン、『カトリック教会と性の歴史』、高木昌史他訳、三交社、一九九六年。Uta Ranke-Heinemann, *Eunuchen für das Himmelreich, Katholische Kirche und Sexualität*, Droemersche Verlagsanstalt, 1990.
ジェフリー・ウィークス、『セクシュアリティ』、上野千鶴子監訳、河出書房新社、一九九六年。Jeffrey Weeks, *Sexuality*, Routledge, 1986, 1989.